２０１６．９．１１
県央史談会

道了尊御本地（県下名勝史跡四十五佳撰１１番）を訪ねる

～下糟屋から温水まで糟屋道を辿る～

１．下糟屋（柏屋上宿バス停下車）

（１）下糟屋村（『風土記稿』）

○江戸より十五里、古高部屋郷と唱へしと云、（中略）家数九十一、廣（ひろ）三十町半餘、袤（ぼう）七町餘（中略）往昔糟屋氏、代々領せし事は、上村條に辨ず、・・・
○古は、毎月五、十の日、市立しが、今廃す（江戸時代の初頭には廃絶）、脇往来四條係れり、大山道（柏尾通）、幅二間下同、矢倉澤道・伊勢原道・田村道等なり、人馬継立をなす、・・・
○矢倉澤道は北、愛甲郡愛甲村へ一里、南、郡中伊勢原村へ十八町、大山道は、西、上糟屋村へ一里東、戸田村へ一里を継送る・・・

（２）糟屋道　伊勢原の下糟屋宿から高森・愛甲・長谷・温水・戸室・林を通過し、及川から分岐して、荻野新宿に向かう全長約１０㎞の庶民の道で、荻野往来とも呼ばれていた。
巡見道　江戸時代に将軍の交替や飢饉の際等に全国の幕府直轄領の政治、民情の調査を目的に巡見使が通行した公の道で、下糟屋から荻野新宿に向かう巡見道は糟屋道を通った。

（３）江戸時代の下糟屋宿（別紙『下糟屋宿絵図』参照）

①下糟屋宿　矢倉沢往還と大山道柏尾通りの合流点で、旅人も多く旅籠、問屋、万屋、薬屋、質屋等があり、江戸時代から明治時代にかけて繁盛した。往時は、大山詣の旅人や物資を運搬する人が集まり、伊勢原宿に劣らず賑わっていたという。

②下糟屋宿は、旅人には便利な位置にあるため大山詣の旅人が麓の宿坊に泊まらず、ここを利用すると困るので、地元宿坊の要請で宿屋の許可が下りなかった。それで農家がいわば民宿の形で宿屋を営業していたという（明治35年（1902）2月に大火、放火説あり）『大山街道』中平龍二郎　。

２．高部屋神社［本殿・拝殿・幣殿］～国の有形文化財登録（H28.2.25）

（１）由緒・伝承

①延喜式内社　『風土記稿』に「八幡宮鎮守なり、延喜式に載たる、當国十三座の内、高部屋神社なり」とあり、糟屋庄の総鎮守であった［別名八幡神社（糟屋八幡宮）］。
【伊勢原市内の式内社】～他に比々多神社、大山阿夫利神社の２社がある。
創建年代は不詳、一説には紀元前６５５年の創建とも伝えられている。

②祭神五座　応神天皇、若宮大神（仁徳天皇）、気長足姫大神（神后皇后）、姫宮大神（大日霊貴命又は磐之姫命）、住吉大神（表筒男命、中筒男命、底筒男命）である（『風土記稿』）。
創建から平安時代までは、住吉大神（三筒男命）が主祭神であった。住吉大神は、海の神、航海の神とされている。神武天皇（神倭伊波礼毘彦命）は、明治以降に主祭神に加えられた。

③高部屋神社の移転・造営　鎌倉時代に源頼朝の家人で糟屋庄の庄司（地頭）であった糟屋有季が、当時現地西方７００ｍの弥杉にあった高部屋神社を自らの館の近くに移し守護神として新たな社殿を造営した。この社の辺りは、有季の居館（丸山城跡）と伝えられている。
また、室町時代に入ると扇谷上杉氏の重要な戦略拠点（相模国守護所?）であったとの説もある。

（２）県重文の銅鐘　至徳３年（1386）１２月に河内守国宗によって造られ、平秀憲（上杉氏か）が寄進した。当時の糟屋の荘の総社であった旨記されている。
また、天正１９年（1591）には社領１０石の朱印状が与えられている。

（３）本殿　旧本殿は、部材から正保４年（1647）の建築で、五間社流造（県内では鶴岡八幡宮、箱根神社、六所神社の3社のみ）で、関東大震災で倒壊し昭和４年に柱・彫刻・正面扉等を再利用して再建された。
拝殿　慶応元年（1865）に創建、総檜造りの茅葺きで、向拝の唐破風には、浦島太郎と乙姫が刻まれている。注連にはホンダワラ（神馬藻）が吊すされている。また、拝殿正面軒下には、山岡鉄舟の筆による「社号額」が掲げられている。

（4）神　　事～汐汲み儀式、雨乞いの行事

①汐汲み儀式　儀式用の浜砂は、住吉大神が上陸したと言う大磯照ヶ崎海岸から採取する。海水は鎮火水とし、浜砂はお清めのために参道に撒き、ホンダワラは拝殿と鳥居の注連縄に吊るす。「汐汲み神事」は、「住吉大神」が大磯に上陸して、そこに鎮座したことを伝える高麗王若光の話と類似しているという。（日向の鎮守「白髭神社」の祭神は高麗若光）

②雨乞いの行事　当社には、昭和八年まで雨乞いの行事があり、その際に使用したと言われる技楽面三面が残っている。地区内の水神池で神官が祈祷をし、黒面役が「竜王や、竜王や」と呼べば、赤面役が「雨を降らせたもれ」と応じる問答を大声で唱えながら水を掛けあったというが竜王は密教で雨を祈る本尊。当社には浦島太郎と乙姫、柱に巻き付く竜や竜宮の彫刻もあり、雨を呼ぶ龍との関係や浦島太郎と当社の祭神住吉大神との関り等も興味深い。

（5）糟屋郷・糟屋有季・丸山城

①糟屋郷　平安時代の糟屋庄（荘園）の中心の郷。平治元年(1159)の太政官牒（安楽院古文書）には、鳥羽上皇が建立した安楽寿院の荘園として「壱処〈字糟屋庄〉在相模国」とある。糟屋氏は、藤原良方(左大臣藤原冬嗣の孫)の子の元方が、この地に土着して、糟屋氏を名乗った。また、糟屋氏は、「武蔵七党の横山党の流れ」という説もある（『姓氏家系大辞典』）

②糟屋有季　鎌倉時代前期の武将、源頼朝・頼家に使えた後家人、相模国大住郡糟屋荘（現伊勢原市一帯）の荘司である父糟屋盛久の子、妻は比企能員の娘。有季の娘は頼家の側室で、公暁の母。一族は糟屋荘全体に繁栄し居館は、丸山城址（千鳥ヶ城址）と伝えられている。

③比企氏の乱　有季は、源頼朝に仕え活躍したが、比企氏の乱で討ち死。生誕未詳、建仁３年(1203)９月死没。一族は、鎌倉をさって、京の朝廷で後鳥羽院の武士として仕えた。その後承久の乱で京方として敗北し、有季の子らは全て討ち死にしている。

④丸山城址　『風土記稿』下糟屋村の条に「糟屋左衛門尉有季居蹟　西北の方にて、八幡境内より社領の地に係り、東西百間餘、南北百十間餘（約１万１千坪）、其邊を殿ノ窪と字せり、四面に堀の遺形あり、有季は将軍頼朝、及頼家に仕へ功ありし事、【東鑑】【源平盛衰記】に見ゆ」とある。土塁は幅１１ｍ、高さ４ｍ。堀は幅１６ｍ、深さ５ｍで障子掘である。なお、高部屋神社は、丸山城の敷地の一部に建立された。現在は、丸山城址の大部分は公園（約７７００坪）になっている。

３．若宮神社（矢倉澤往還と大山道柏尾通りの合流点近く）

（1）創　建　仁壽元年(851)、祭神　仁徳天皇

（2）能條家に伝わる縁起（下糟屋宿の通りには３軒の黒塀の能條家がある）

○『風土記稿』に「若宮八幡宮　本地仏大日を置、縁起に據に、仁壽元年(851) 東三條左大臣の東男、兵庫頭某、故有て當国に下向あり、其子岩若丸、當所豊富能條太郎兵衛と云者の家を継、其父兵庫頭の遺骨をここに納め、若宮八幡と崇めしと云、」とある。

○若宮神社は、仁寿元年に東三条左大臣の息子兵庫頭某が当地に下向し、その子の岩和丸が当村の能條氏（地頭）を継ぎ、無念の想いで亡くなった父の霊を慰めるため父の遺骨をここに納めて八幡宮をここに勧請したものと伝える（御霊神社）。なお、当社は天正１９年には社領１石５斗の朱印地が与えられた（『伊勢原市史近世民俗編』）。

○岩若丸の母は、八条左大臣の姫君であり、兵庫頭とは相思相愛の中であった。しかし姫に天皇妃となるべき宣旨が下された。思い余った二人は、東国へ逃れ津久井の石老山の岩屋に隠れ住んだ。そこで岩若丸が生まれたが、岩若丸三歳の時母は、何者かに連れさられてしまった。この悲しい出来事から父の母捜し、後に岩若丸の父母捜しの旅は始まった。

○岩若丸は、奥州で死の床にある父に巡り逢ったが、間もなく父は帰らぬ人に。その後百姓に売られた母に再会したが父の死を知った母は悲嘆にくれ、最早東国には未練は無く故国京都へ戻って行った。（『史跡と文化財のまち　いせはら』）

４．小金塚周辺の白金地蔵・道標・小金塚古墳

（1）高森の白金地蔵　茂田半右門らが、万延元年(1860)子育地蔵として建立した。色褪せた赤のよだれかけを幾枚か重ねたお地蔵様は里人の悲願を一身に受けていたという。再三の移築後、平成７年８月に寿経寺に移籍、現在地に永久鎮座した。この場所は旧矢倉沢道と荻野道との三叉路にあたるという。

①白金地蔵は、三体あるが現在のものは近年再建された。明治４０年２月にも１体再建され旧地蔵尊がのる台座の内１点は道標であった。総高137㎝、地蔵尊高76㎝（『伊勢原市内の大山道と道標』）

②再建後の地蔵尊の台座は、道標ではないが、再建前は次のように彫られていたという。
【標示】　「左」　おきのミち　「正面」前　「高」森村　（『伊勢原の道しるべ』）
「右」　施主　「裏」　供養仏　あつきミち　月日　同行七人

（2）道標（矢倉沢往還）～（正面）「東厚木町に至ル」とある。この道標は、大正３年に御大典記念として小金塚青年団が造立した（右面は昭和三年に追刻）。

○この道標は、明治３５年に出来た大山道新道（矢倉沢往還）にある。
○道標には、（左）南「戸田渡船場ニ至ル」、（右）北「小金塚青年団」昭和三年九月、（裏）西「成瀬村役場ヲ経テ伊勢原町」とある。（『伊勢原市内の大山道と道標』）

（3）小金塚古墳・小金（黄金）神社、御野立所（のだてしょ）（大演習などで天皇が展望される野外の休息所）

①小金塚古墳　成瀬小学校の東方に小高い丘があり、小金塚と呼ばれる古墳時代前期の円墳がある。「朝日さし夕日輝くこの下に黄金千杯、漆千杯」と歌われる景勝地でもある。以前の調査では、直刀や古土器、縄文時代後期の住居址も発掘されたたという。また、平成２２年の古墳下側の調査で、弥生時代中後期、古墳時代前期の住居址も見つかった。

○古墳の概要　相模最大の円墳　東西径４７ｍ、南北径４９ｍ、高さ６．２ｍ。
４世紀末の築造で、墳頂部には、小金神社の社殿が建っている。
○発掘調査の結果(1984年)、幅約１０ｍ、深さ約１ｍの周溝を確認。周溝から朝顔型埴輪２個体（南関東最古のもの。現在高約80㎝で、精巧）・円筒埴輪片・青銅製リングが出土（『神奈川の歴史散歩』）。

②小金神社　小金塚の上に祀れている神社。祭神は「金山彦命」で金を鋳る術の神である。「小金塚の地名」は、金属の鋳造に縁のある呼び名といわれる。７世紀の頃、高句麗から大磯の地に亡命してきた高麗若光らによって鋳金の技術がもたらされ、この辺りにもその技術が伝えられたという説もある。

③御野立所　大正１０年(1921)１１月１８日昭和天皇（当時摂政宮、大正天皇の名代）は陸軍大演習に際し、ここを御野立所とされた。小金塚の一隅には「鶴駕行啓之所の碑」が建てられている。「鶴駕」（カクガ）は、皇太子の車のことで当日殿下は、菊の御紋の付いた黒塗りの自動車で来られたという（『小金塚風土記』白鳥宏）。

５．高森神社～明治初年までは「高部屋神社」と称されていた～　トイレ

①鳥居脇の石碑表には「旧社格郷社高森神社」、裏には「延喜式内社　高部屋神社」と刻まれている。石碑の年号は嘉永３年(1850)と明治６年(1873)で、その当時はここが高部屋神社と呼ばれていたのであろうか。現在の高部屋神社は、かって「八幡社」と呼ばれていたことを考えると、高森神社が往古の高部屋神社であったという説も強ち否定は出来ない。

②祭　神「味耜高日子根命（あじすきたかひこねのみこと）」は、日本に水稲文化を広めた「鴨族」であり、大国主命と宗像三女神のタギリヒメノの間の子である。命は、高鴨神社（奈良にあり、京都の賀茂神社を始めとする全国の鴨（賀茂・加茂）神社の総本社）の祭神であり、この辺りでは珍しい。

６．道了尊御本地（高森道了尊～松高庵）～県下名勝史跡四十五佳撰　１１位

（1）「道了尊御本地」の碑・・・１２３．４１７票獲得（10位「宮ヶ瀬渓谷」131、222票獲得）

○投票期間中の紙面（9月6日から10月9日までの見出しから）～『県央史談』第５４号
９／３０「“宮ヶ瀬渓谷”勝名乗り、道了尊御本地風雲を衝く」と大接戦の様子。
○村ぐるみの猛運動、道了講中の組織票などにより、大健闘の１１位を獲得か？

（２）由緒・伝承　『風土記稿』に「松高庵　揚柳観音　長七寸、運慶作を本尊とす。當庵は関本村足柄上郡属、最乗寺開山了庵、及徒弟道了居住の地なりと云、村持ち」とある。

①「△道了権現社△了庵石碑文字見えず、高一尺八寸臺石を了庵座禅石と呼ぶ、長四尺、幅二尺五寸、△袈裟掛松是も了庵の袈裟を掛しと云、圍一丈一尺三寸」とある。
「松高庵の名前」も、太くて高い袈裟掛松に由来するものと思われる。

②松高庵は、『風土記稿』には了庵と道了が共に住んだと記しているが、近くにある関泉寺（曹洞宗）の塔頭（分院、脇寺）と伝えられている。「現在の高森道了尊」は、神仏混合の施設であり、高森神社の吉田宮司が管理している。（信者２００～３００人）

③最乗寺（曹洞宗）を応永元年に(1394)開山した了庵慧明（りょうあんえみょう）は、建武４年(1337)の生まれで、下糟屋亀井家の出身。弟子の妙覚道了は了庵とは幼馴染みで高森村髙梨家の出身という。

道了は、怪力の持ち主で、最乗寺の創建や土木工事にも協力したが応永１８年(1411)了庵が７５歳で妄くなると同時に没し、寺門守護と衆生救済を誓って天狗になったと伝えられ最乗寺の守護神として祀られた。庶民の間でも信仰をを集めて各地で講が結成された。

④天狗　中国では流星、日本では山の神にあてられた妖怪。中世以降修験道などの影響で、鼻が高く嘴と羽翼を持ち、山伏の服装をして天空を跳び神通力を持つ天狗像が成立した。奥宮には「道了」が祀られ、鼻の高い大天狗や鳥天狗が安置されている。「道了」は、神通力抜群の山伏僧であり、行者であった。

⑤厚木の民俗３「講」（昭和58年3月発行）には、「今回の調査では高森の道了講が戸田で１例、大雄山の道了講が厚木・妻田で各１例採集され、林では天保５年(1834)の道了大権現の石造物が確認された」とある。厚木では、戦前には道了講が盛んに行われていたという。

7　愛甲老人憩の家（昼食、トイレ）

○昼食後　講話　「愛甲三郎を語る」　講師　井上隆之氏

8．愛甲橋周辺の石造物・道標・標柱など

（１）愛甲村（『風土記稿』）

○「江戸より十四里余、片平郷と唱ふ、東西十六町半南北六町半東、大住郡酒井・下津古久二村、南上落合・石田・高森三村、北、長谷・船子二村、家数百三十五、郡名の起れる原村にして愛甲三郎季隆爰に住し、在名を氏とす」（中略）

○「村の巽（南東）矢倉澤道幅二間下同じ係れり、当村人馬の継立を承れり　当方厚木村へ一里、西方大住郡下糟屋村へ二十八町、又同郡伊勢原村へ一里余巡見道西寄を通ず、」

（２）御屋敷添橋付近の３基の石造物及び屋敷添橋の標柱（トイレ）

これらは愛甲の御屋敷添橋付近を通る糟屋道と神明社の旧地にある。また、『風土記稿』記載の「巡見道」にもあたる。

①愛甲の廻国供養塔碑（『石の神仏』ＮＯ１２）

○享保４年(1719)建立、正面には「南無阿弥陀仏」と記されており念仏供養を兼ねている。

○銘文には「日本廻国六十六部供養　願主諦観」とある。「六十六部」は書写した法華経を全国６６ヶ所の霊場に１部ずつ納める目的で、諸国の社寺を遍歴する「行脚僧」のことである。裏面にある「服部氏」は、願主諦観の関係者と推測される。

②道標　上部は折れており、刻まれている文字も判読しにくいが次のようにも推測される。

（七）？　　（かす）？　　（一ノ沢）？　　（おぎ）？
［左］□澤道、［正面］□□や道、［右］□□□道、［裏］□□の道

③屋敷添橋の標柱（愛甲３６７付近）

標柱には「この橋は、東京オリンピックに際し建設された。「屋敷添橋」の名称は、この付近一帯が、鎌倉幕府の後家人愛甲三郎季隆の屋敷であったとされる事から、明治９年に「中ノ御所」から「屋敷添」という小字名に変更される事に由来する。」と記されている。

９．愛甲三郎館跡

①愛甲三郎館跡の標柱　標柱には「愛甲氏は、武蔵横山党の一族で、愛甲庄を領し、館跡は、このあたりと伝えられている。一門の愛甲三郎季隆は、鎌倉幕府の後家人で、「弓を取っては天下の名手、毎年のお弓始めの行事には、参加していた。」と記されている。

②愛甲三郎季隆　久安６年(1150)愛甲季兼の三男として生まれ、元久２年(1205)６月日畠山重忠の乱では重忠を弓で打ち取った。建暦３年(1213)５月２日和田義盛に味方し、由比ヶ浜で討死した。本拠地を奪われた愛甲氏はこの地を離れてしまったが、「島津家の家臣となった愛甲氏の子孫」が江戸参勤のおり、「小野神社」に参詣している。

③『風土記稿』は「愛甲三郎季隆居蹟」とし、「西方ニアリ陸田を開ケリ、闊(ひろさおおよそ)凡九百坪、三方ニ売［空］掘土居（土塁）ノ遺形アリ（下略）」と記している。

１０．愛甲・茱萸田の道祖神（「道祖神」ＮＯ１３）

①道祖神は、愛甲小学校に向かう細い道の道路沿いに祀られている。この道が糟屋道の旧道である。道祖神の文字を刻む角柱塔には、昭和１８年再建の銘がある。この像は、他の石造物と一緒にセイノカミとして祀られている。

②船形光背双体像二体　双体像の一体には、文化２年(1805)と刻まれている。もう一体には、右肩に「大昆廬遮那仏」、左肩に「□那仏」と刻まれている。その他中世の石像物（五輪塔宝筐印塔の一部）が積み置かれている。

１１．ぼうさいの丘公園周辺（トイレ）

（１）みたどの標柱（長谷８８７－５付近）

○この地にはかって阿弥陀堂があり、「あみだどう」が鈍って「みたど」になった。
○春秋の彼岸には、地元の講中の人が集まり、今でも念仏講が続けられている。
○近くには、清水の湧き出る井戸があり、道（糟屋道）行く人々の喉を潤したという。

（２）ホウダイヤマ一号墳（ぼうさいの丘公園内）～解散（バス停温水発～15／27、38、39、57
16/03・・・・）

①古墳の概要　前方後円墳。墳丘は失われていた。全長約６５ｍ、後円部径約３５ｍ、前方部幅約３０ｍ、くびれ部約１３ｍ（推定）。４世紀後半の築造。

②発掘調査　１９９９年の公園建設に伴う調査で、大規模な周溝(幅6~14m)を確認。

③出土品　土師器、特にくびれ部から見つかった大型壺形土器・薄手の精製土器(器台・甘)は、器台・甘をセットとした土器祭祀が行われていたことが窺われる(『神奈川の古墳散歩』相原精次著)。
なお、甘は甘堝(るつぼ)のことで物質を溶融し、または灼熱するための耐火性の深皿である。

④厚木市内のその他の前方高円墳（参考）

○地頭山古墳（厚木市船子）～全長７２ｍ、後円部径約３６ｍ、高さ７ｍ、前方部幅２４ｍ、高さ６ｍ、５世紀前葉～中葉、４世紀後半築造といわれている。

○愛甲大塚古墳（厚木市・伊勢原市）　全長推定８０～９０ｍ、後円部径約４５ｍ、現状は３０～４０ｍ、高さ約５ｍの楕円状。築造は５世紀前半（４世紀後半説もあり）。

愛甲三郎季隆（えたか）

1．初見の資料

出典：「吾妻鏡」に２７回記載され登場。

鎌倉幕府の事績を記した史書（１１８０～１２６６年までを記述）。５２巻

2．出身地：武蔵国横山庄（八王子市）から愛甲へ移り住む。

出自：武蔵七党の横山党という武士団の一つ。小野氏系図。孝（隆）泰の時「武蔵守」に任ぜられ、その子義隆が横山に住む。

隆兼が 1113（天永 4）年３月４日愛甲内記太郎を討つ。上京し源義家の孫の源為義から愛甲庄を賜る。この事件には、同族の光兼も関係し愛甲庄とのかかわりを深くし，季兼，子の三郎季隆がこの地に土着する。

同族に海老名氏など。

3．愛甲三郎季隆の生没（？～１２１３年）。没後 80３年。

初見は 1180 年１２月２０日。「吾妻鏡」の記録に登場。

源頼朝（1147 生。将軍 1192.7～1199.1，53 歳）。頼家（1202.7～1203.9、1204.7 没、23 歳）。実朝（1203.9～1219.1，28 歳）の３代の将軍に仕える。

和田合戦で戦死。

4．記録から見える活躍。　射芸の名人。故実にも明るい。（調度懸）。

将軍の御前で弓の射手をつとめる（弓始の儀式）６回。

調度懸　５回。牛追物（うしおうもの）、小笠懸（こかさがけ）、遠笠懸（とおかさがけ）、流鏑馬（やぶさめ）など６回。

狩り関係２回。その他（故実、戦い）８回。

5．和田合戦・・・1213（建暦３）年５月２日～３日。和田義盛

6．その後の愛甲氏の動き。

南北朝時代の愛甲氏：義堂周信の日記「空華日用工夫略集」に記載。

1368（応安元）年８月愛甲三品某の夫人（如転）の葬儀を郡の寶積寺で行う。導師は義堂。

1370（応安３）年８月愛甲某が如転の３回忌法要を山崎（鎌倉）の寶積寺で行う。

郡の寶積寺・・・『厚木市史』では愛甲の寶積寺を当てる。

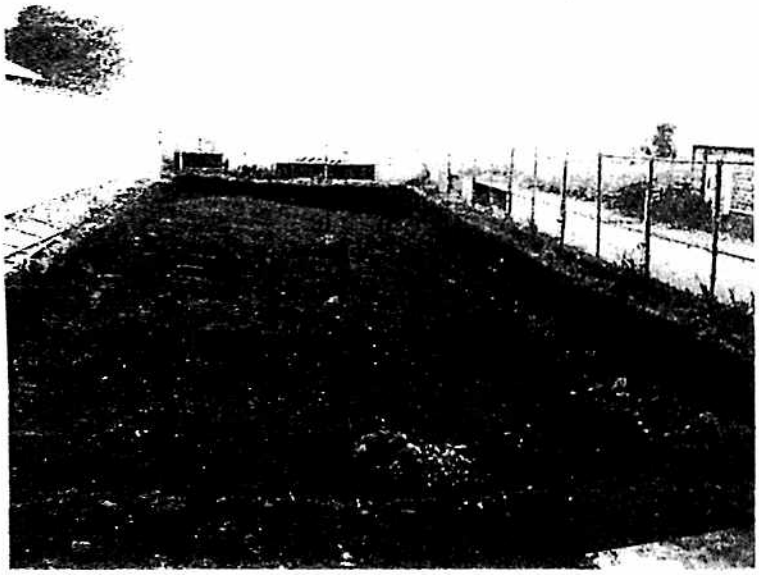
新説：相模原市緑区青山の金徳山光明禅寺（開山：夢想疎石。開基：足利尊氏）。臨済宗建長寺派。旧称寶積寺と号し、桐ヶ谷に伽藍を構えるが、火災により現時地に復興し光明寺と改称。（平成２７年県立金沢文庫特別展：津久井光明寺）。

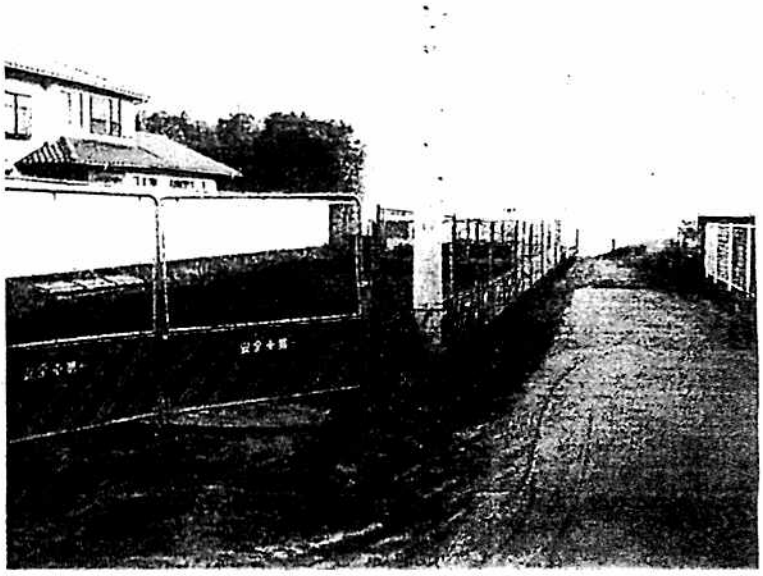
7．愛甲三郎季隆ゆかりの伝承。

上愛甲：伝愛甲三郎館跡。宝積寺の五輪塔。長福寺（香火院）。

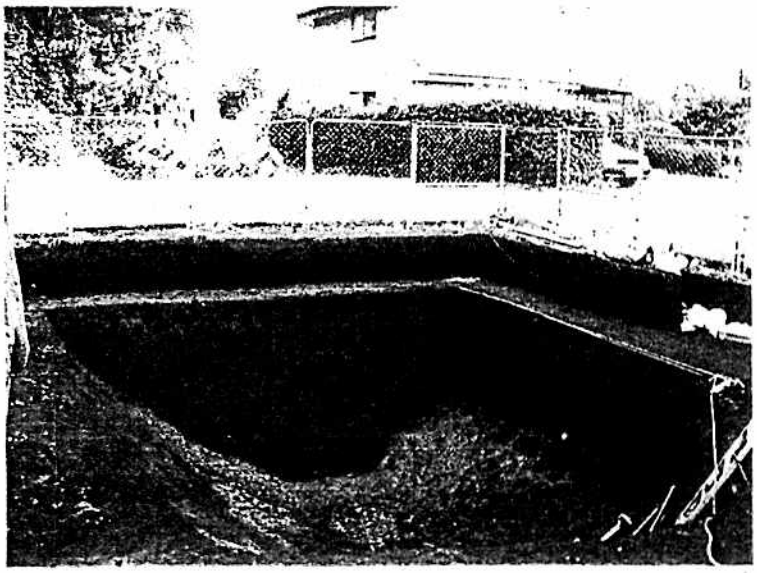
宿愛甲：円光寺の寶印塔。小野：小野神社、縁切り橋。毛利台：遠矢塚。

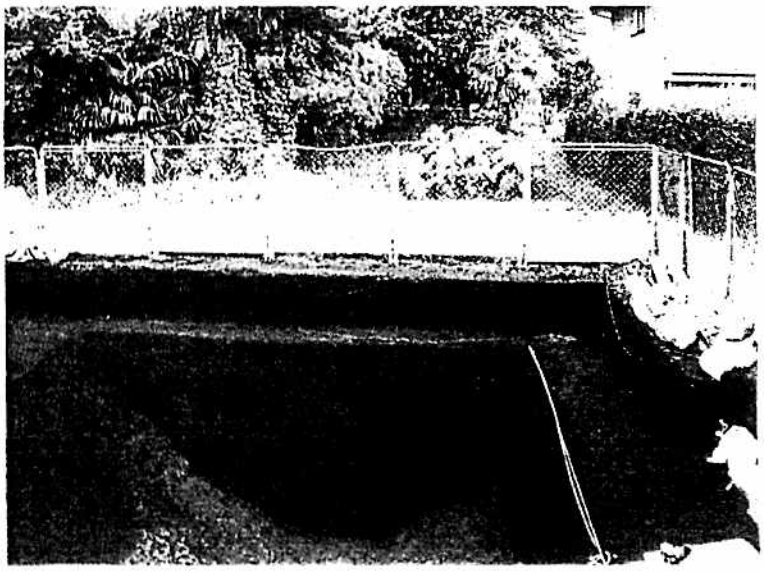
（2018.9.11　　井上隆之　記）

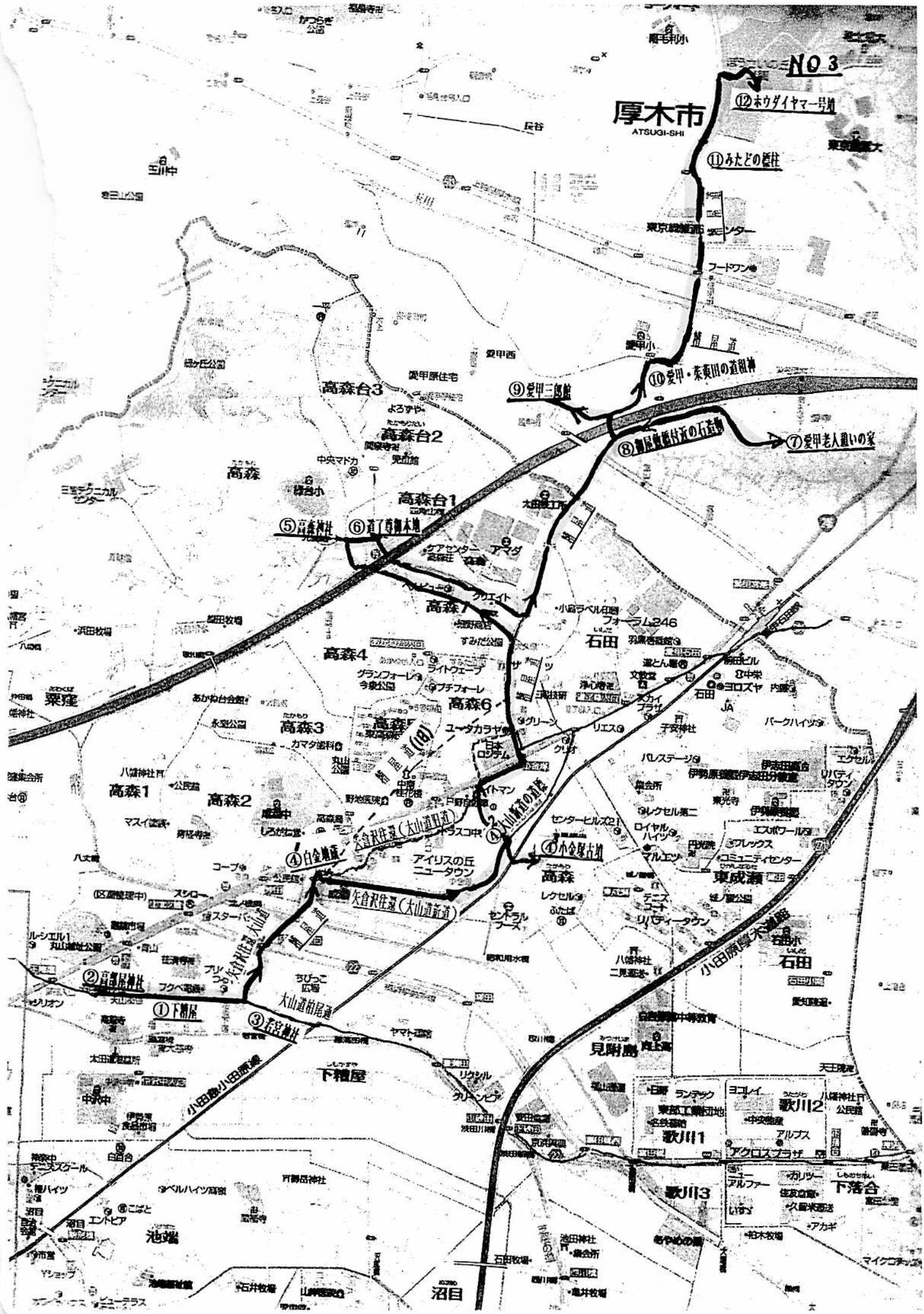




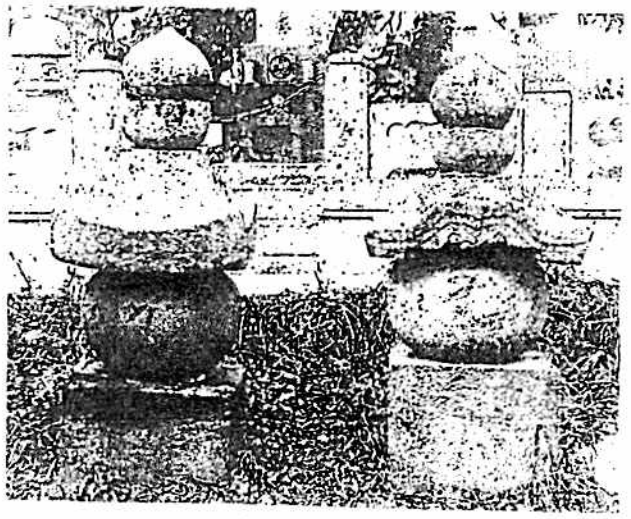
平成 18 年 8 月　　厚木環状 2 号線・御屋敷添
(愛甲三郎季隆館跡東側)　空堀発掘現場





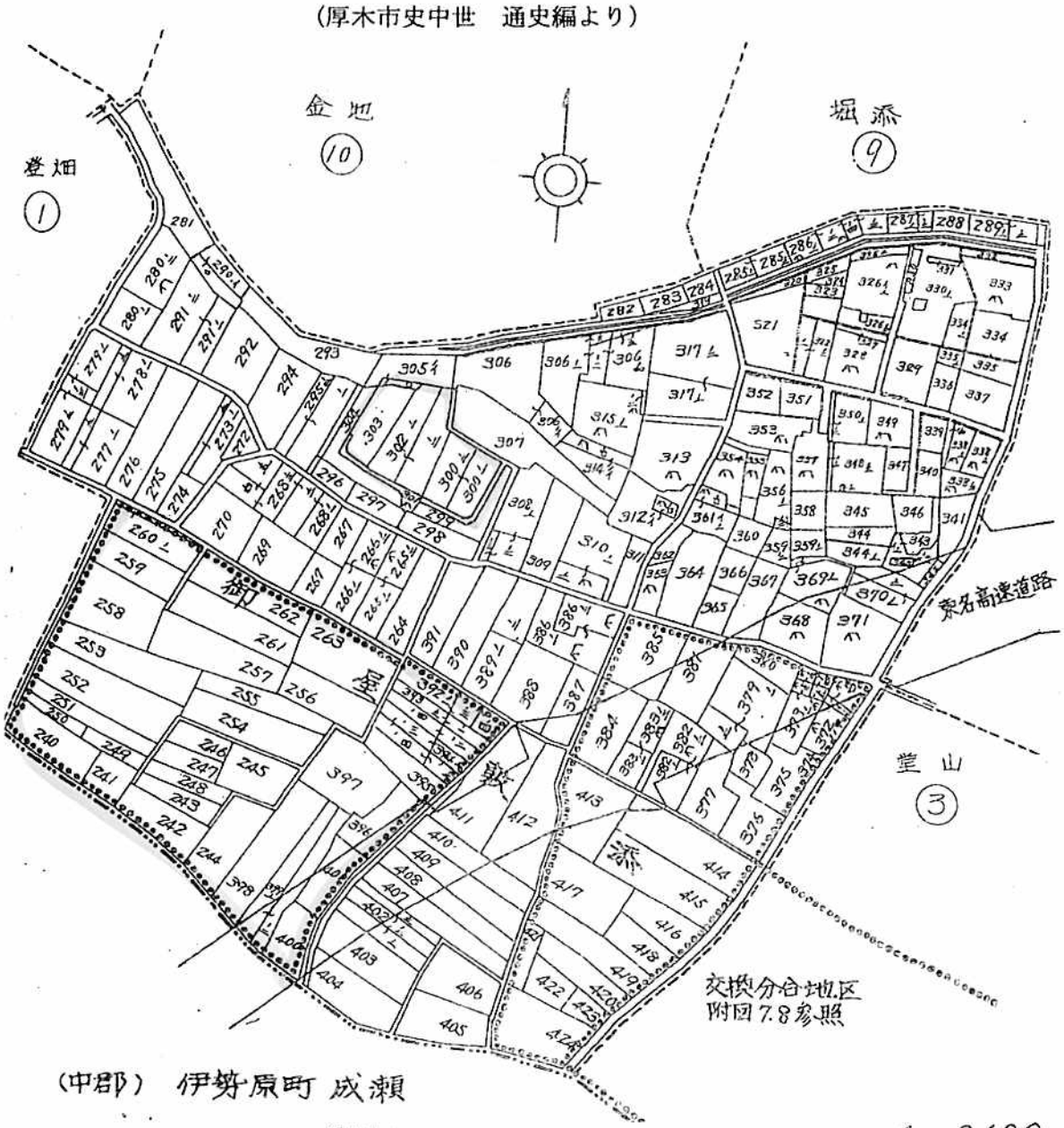

NO 3
厚木市
ATSUGI-SHI
⑫ホウダイヤマー号碑
⑪みたどの碑
⑩愛甲・栄東田の道祖神
⑨愛甲三郎館
⑧御屋敷跡付近の石造物
⑦愛甲老人憩いの家
⑥道了尊御本地
⑤高森神社
④白金地蔵
④大山街道の道標
④小金塚古墳
②高尾神社
①下糟屋
③石宮神社
高森台3
高森台2
高森台1
高森
高森7
高森4
高森6
高森3
高森1
高森2
栗窪
石田
東成瀬
見附島
下糟屋
歌川1
歌川2
歌川3
下落合
池端
沼目
矢倉沢往還（大山道新道）
矢倉沢往還（大山道田道）
矢倉沢往還（大山道）
大山道柏尾道
小田原厚木道路
小田原・小田原道路
東名高速道路
東京都立大
東京経済大
愛甲西
愛甲小
愛甲原住宅
フォーラム246
アイリスの丘ニュータウン
ニュータウン
ユータカラヤ
日本ロジテム
ライトウェーブ
プチフォーレ
ロイヤルハイツ
センタービルズ21
ルレセル
ふたば
リバティータウン
ハイツ
ハイツ高森
ベルハイツ高森
池田牧場
石田牧場
亀井牧場
沼目牧場
沼目
池端
ビューテラス
エントピア
こばと
Yショップ
ルシエル1
丸山城址公園
青山
ちびっこ広場
ヤマト運輸
大田運輸工場
中央マドカ
児童館
関東寺
よろずや
たからだい
高森
緑台小
三菱テクニカルセンター
クアセンター高森荘
アマダ
クロエイト
すみだ公園
今泉公園
グランフォーレ
あかね台会館
永泉公園
カマタ歯科
丸山公園
八幡神社
公民館
マスイ塗装
高森寺
しろがね堂
スシロー
スターバ
コープ
(区画整理中)
ドラスコ中
野地医院
中原住宅
ドトマン
ユニクロ
ルレセル
ルレセル第二
ロイヤルハイツ
マルエツ
エスポワール
フレックス
コミュニティセンター
テニスコート
セントラルフーズ
八幡神社
二見商会
昭和用水
石田小
石田
JA
ヨロズヤ
中栄
内藤
石田ビル
文教堂
遠とん屋
三菱技研
スカイプラザ
リエス
グリーン
子安神社
パークハイツ
パレステージ
伊勢原警察署
伊志田高台
リバティタウン
エクセル
集会所
東光寺
ランテック
東部工業団地
名鉄商事
ヨコレイ
中央地産
アルプス
アクロスプラザ
ニューアルファー
カリツー
住友倉庫
久留米運送
アカギ
柏木牧場
ベルハイツ高森
こばと
エントピア
Yショップ
ビューテラス
石井牧場
山崎牧場
池田神社
集会所
亀井牧場
西川橋
石田牧場
沼目牧場
マイクロチップ
ルレセル
ふたば
リバティータウン
ハイツ
ハイツ高森
ベルハイツ高森
池田牧場
石田牧場
亀井牧場
沼目牧場
池端
ビューテラス
エントピア
こばと
Yショップ
沼目
沼目
ルシエル1
丸山城址公園
青山
ちびっこ広場
ヤマト運輸
大田運輸工場
中央マドカ
児童館
関東寺
よろずや
たからだい
高森
緑台小
三菱テクニカルセンター
クアセンター高森荘
アマダ
クロエイト
すみだ公園
今泉公園
グランフォーレ
あかね台会館
永泉公園
カマタ歯科
丸山公園
八幡神社
公民館
マスイ塗装
高森寺
しろがね堂
スシロー
スターバ
コープ
(区画整理中)
ドラスコ中
野地医院
中原住宅
ドトマン
ユニクロ
ルレセル
ルレセル第二
ロイヤルハイツ
マルエツ
エスポワール
フレックス
コミュニティセンター
テニスコート
セントラルフーズ
八幡神社
二見商会
昭和用水
石田小
石田
JA
ヨロズヤ
中栄
内藤
石田ビル
文教堂
遠とん屋
三菱技研
スカイプラザ
リエス
グリーン
子安神社
パークハイツ
パレステージ
伊勢原警察署
伊志田高台
リバティタウン
エクセル
集会所
東光寺
ランテック
東部工業団地
名鉄商事
ヨコレイ
中央地産
アルプス
アクロスプラザ
ニューアルファー
カリツー
住友倉庫
久留米運送
アカギ
柏木牧場
ベルハイツ高森
こばと
エントピア
Yショップ
ビューテラス
石井牧場
山崎牧場
池田神社
集会所
亀井牧場
西川橋
石田牧場
沼目牧場
マイクロチップ

愛甲円光寺宝篋印塔



愛甲宝積寺五輪塔

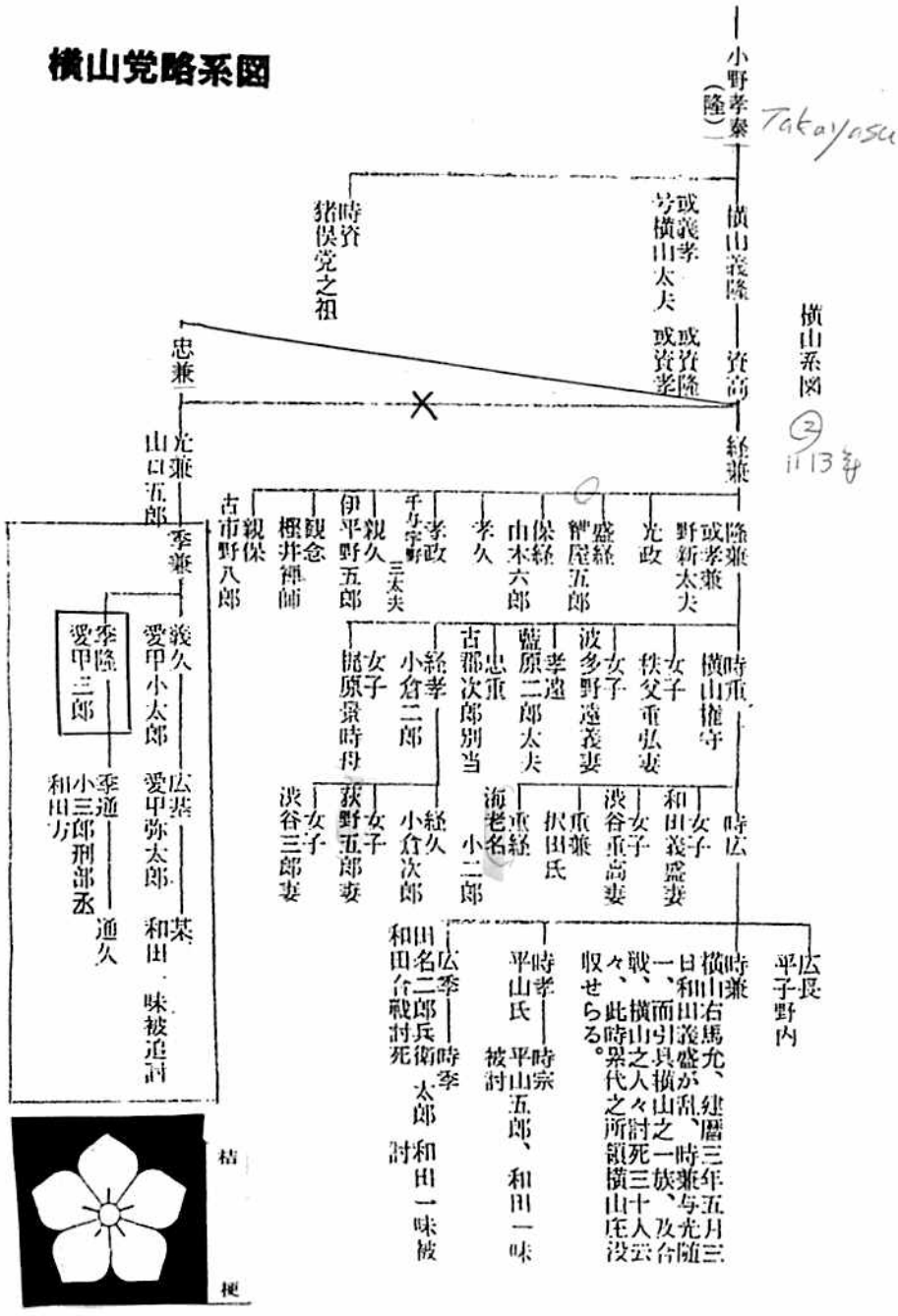
（厚木市史中世　通史編より）



（中郡）　伊勢原町 成瀬

（「最新土地名鑑」三光地図社・昭和40年より）　1：2400

横山党略系図



（厚木市史編纂委員会：厚木中世史話より）

（一部追加変更）

吾妻鏡に見える記載

	西暦	月	日	元号	事象
1	1180	12	20	治承4	源頼朝、弓始の儀を行う、愛甲季隆等，射手を勤む　（御的日記にも記載あるが人名に異同あり）
	1181	10	15	養和元	源頼朝，新造の第の弓場始の儀を行う。愛甲季隆等、射手を勤む（御的日記）
2	1182	4	5	養和2	源頼朝、江島弁才天社供養の帰途牛追物を催す、愛甲季隆等，騎射をなし褒賞を賜う
3		6	7	寿永元	源頼朝、牛追物を由比浦に覧る、愛甲季隆等，射芸を披露す
4	1184	3	18	寿永3	源頼朝、伊豆に狩し、愛甲季隆等を御前の射手と為す
5		4	1	寿永3	源頼朝、愛甲季隆･下河辺行平等に鹿皮を与う
6	1185	10	24	文治元	源頼朝、南御堂落慶供養を行う、愛甲季隆等，調度を懸く
7	1188	1	6	文治4	源頼朝、的始を行う、愛甲季隆等，射手を勤む
8	1191	3	13	建久2	鶴岡八幡宮若宮仮殿遷宮あり、愛甲季隆、調度を懸く
9		9	21	建久2	源頼朝、稲村崎に遊びて，小笠懸を行う、愛甲季隆等，射手を勤む
10	1192	1	5	建久3	源頼朝、的始を行う、愛甲季隆･下河辺行平等，射手を勤む
11	1193	5	8	建久4	源頼朝、富士野に狩するため鎌倉を出立す、北条義時･愛甲季隆等，供奉す
12		5	16	建久4	源頼家、始めて鹿を射る、源頼朝，助勢せし愛甲季隆を褒賞す
13		5	28	建久4	曾我祐成･時致兄弟、父の仇工藤祐経を討つ、愛甲季隆等、防ぎて疵を負う
14		11	27	建久4	永福寺薬師堂供養、源頼朝、これに臨む、愛甲季隆、調度を懸く
15	1194	8	8	建久5	源頼朝、日向山霊山寺に参詣す、中原広元、下毛利庄において駄餉を献ず
16		閏8	1	建久5	源頼朝、山荘を三崎に設けんとして三浦に赴く、愛甲季隆等、小笠懸の射手を勤む
17		10	9	建久5	源頼朝、小山朝政の邸に臨み、弓馬堪能の士を召し、故実を問う、愛甲季隆、其列にあり
18		11	21	建久5	源頼朝、鶴岡八幡宮末社三島社に参詣す、愛甲季隆等、小笠懸の射手を勤む
19		12	26	建久5	源頼朝、永福寺薬師堂供養に臨む、愛甲季隆、調度を懸く
20	1195	3	12	建久6	源頼朝、東大寺供養に臨む、愛甲季隆、調度を懸く
21		8	16	建久6	源頼朝、鶴岡八幡宮に参詣し、流鏑馬を催す、愛甲季隆、射手に選ばる
22	1203	10	9	建仁3	幕府、政所始及び弓始を行う、愛甲季隆、謝手を勤め褒賞を賜う
23	1204	2	12	建仁4	源実朝、由比浜に於て小笠懸･遠笠懸の技を見る、愛甲季隆等、的を射る
24	1205	6	22	元久2	北条時政、畠山重忠･重保父子を討たしむ、愛甲季隆、重忠を討ち取る
25	1211	1	9	承元5	幕府弓始、愛甲季隆等、射手を勤む
26	1212	1	11	建暦2	幕府弓始、愛甲季隆等、射手を勤む
27	1213	5	2	建暦3	和田義盛、北条義時･中原広元を攻む、愛甲季隆等，義盛に味方して討死す